5月29日に『宝くじの助成金』を活用して実施した講演の内容を、要約してお届けします。

小松和彦

いざなぎ流の魅力と文化的価値

国際日本文化研究センター所長
小松和彦さん
専門は民俗学・文化人類学。『憑霊信仰論』をはじめ著書多数。いざなぎ流研究の第一人者で、日本文化学をリードし続ける存在。

失われゆくいざなぎ流

いざなぎ流は、太夫からその弟子へと口伝により継承されてきたもので、書き物としての資料が非常に少ないという特徴があります。

いざなぎ流には教祖はおらず、太夫の免許証があるわけでもない。地元の人が「太夫になろう」と思って弟子入りし、知識を学び、太夫になる。民間信仰と呼んでいいと思います。40年前には、小さな集落に何人もの太夫さんがいました。現在では香美市の中でも数えるほどしかいなくなり、どんどんその貴重な知識が失われていっています。

その魅力と文化的価値

さて、いざなぎ流というのは、陰陽道を核としながら、仏教や修験道、神道の知識等々が入り乱れ、時代の流れの中で複合的に堆積して現在まで伝えられたものです。ではその魅力的な世界を形づくる、いざなぎ流の特徴とは何でしょうか。

まずは神祭り。書き物がないいざなぎ流にとって、祭りの場は伝承のための母体とも言えます。祭りは非常に複雑ですが、大きく3つに分けると、穢れを祓う『スソ（呪詛）の取り分け』、祭りの中核である『本祭り』、最後に荒神たちを鎮める『荒神鎮め』という構成です。祭りは『バッカイ』と呼ばれる天蓋の下で行います。この『バッカイ』に似たものは、西日本のさまざまな地域の氏神祭りや神楽などで見られます。つまりこれは、西日本の各地域で独自の発展を遂げてきた神楽の一つとして、いざなぎ流の神楽があるのだということを示しています。

次に祭文です。儀式の中で太夫さんがブツブツと呪文のように唱えるのですが、中身は、神々の素性や由来を説いた『中世的神話』です。世の中の始まりを説いた物語、いざなぎ流の起源を語った物語など、非常にたくさんの祭文があります。

そして式王子（式神）の使役。いざなぎ流において は、山の神様も水神様も、ありとあらゆる神様や魔群の類いを式神化してしまう。「岩を割る」とか「雨を降らす」などの行いを命じ、操るとされます。つまり、安倍晴明に代表されるような「呪詛し、呪詛を祓う」という陰陽道の流れを汲む作法が残っているのです。

さらに御幣。紙で作るものなので使った後は捨ててしまいます。多くの御幣には目鼻が付いており、人形に対する独特の感覚が表れているのではないでしょうか。

最後に面です。非常に素朴で、写実的ではないけれど何だかリアル。面は家や集落に伝えられ、普段は箱に入れて天井裏などに隠しておき、必要なときだけ下ろしてきて、神祭りの中で使われたりします。

世界が注目するいざなぎ流

さて、40年にわたる研究により、いざなぎ流を日本の宗教文化史の中に位置づけるところまで来たと思います。そういう意味では、改めてここから、さらなる研究が必要だと思います。そのためにも、地域に残る資料や遺物を調査し、現役の太夫さんたちから話を聞いて知識を取り込み、残していく努力が必要です。

いざなぎ流は、日本の宗教学者だけが関心を持っているわけではありません。世界の日本研究家たちからも、日本の信仰に対する非常に典型的な素材として注目を集めてきています。

かつて私は、太夫さんとともにニューヨークで御幣切りを披露しました。御幣に限らず、面や太鼓や神楽など、いざなぎ流を構成するさまざまな要素をもっと磨けば、日本文化を知る上で欠かせない素材として世界中が注目するはずです。

いざなぎ流を失われた過去の文化とするのではなく、未来に活かしていく方法を考えていければと思います。

京極夏彦

いざなぎ流の通俗的な受容について

小説家
京極夏彦さん
1994年に長編小説『姑獲鳥の夏』でデビュー。『後巷説百物語』で第130回直木賞受賞。お化け大学校・水木しげる学部教授。

いざなぎ流の誤解

いざなぎ流の初期の受け取られ方というのは甚だ失礼なものでした。まるで淫祠邪教のような扱われ方だったのですね。

なぜでしょう。見たことがなかったからです。聞いたことがなかったからです。自分たちの知る日本の文化とはあまりにも違っていたため、『特殊なもの』に思えたのでしょう。綾笠を被ってユラユラ揺れながら聞きなれない言葉の混じった祭文を語る……初めて目にする非日常な光景に、これは限られた、閉ざされた地域にのみ伝えられた、怪しい宗教だと、そう考えるしかなかったのでしょう。

『陰陽師ブーム』が日本を席巻した時期がありました。中核をなしたのは娯楽作品でしたから、陰陽師も単なるジャパニーズマジシャンとしてウケていたわけですが、その最中、いざなぎ流は再度注目されることになります。

「いざなぎ流は古い陰陽道の呪法を今に伝えるものである」というのです。これも、正しいように聞こえるんですが、間違いでしょう。大昔、陰陽道が日本中に広まり、それが途絶え、そして隔離された物部にだけ残ったと思っている人は今も多い。でも、それは正しい認識ではありません。

物部はガラパゴスじゃないんです。

いかにしていざなぎ流は今日まで生き残ってきたか

確かにいざなぎ流は、古い形の、他ではもう行われなくなった陰陽道の作法を伝えています。だからといって、いざなぎ流が古い陰陽道であるわけではない。いざなぎ流には陰陽道の他に、修験道的な側面もあるし、密教的な要素も多く含んでいます。もちろん神道の考え方や作法も取り入れられている。信仰のフルコース、神仏混合どころの話ではありません。

いざなぎ流は、その時代その時代で、一番有効と思われる信仰の要素を取り込んできたわけです。密教がいけそうなら真言を、修験道が効きそうなら山伏の作法を取り込む。信仰している人たちが一体何を信じるのか、どういう作法なら納得するのか。太夫さんたちは常に勉強し、いざなぎ流の中に取り込んできたのでしょう。各時代で一番「効く」と思われる手続きを取り込み、次に伝えていく。そしてそれが失効しそうになると、また情報を更新してリニューアルする。そうした行為を繰り返さなければ、これほどリミックスされた信仰体系はでき上がらなかったはずです。

真に誇りに思うべきことは

いざなぎ流は、日本の文化を知る上で非常に大事な、かけがえのない無形文化財と言えるでしょう。しかし本当は、現代に至ってなお、信仰として生きているということの方を評価すべきなのだと思います。そこで暮らしている人たちは今もちゃんといざなぎ流を無効にせず、暮らしの中に取り込んで暮らしている。そちらの方が大事なことです。

物部はガラパゴスじゃないんです。逆なんです。

ガラパゴスは閉ざされていたから、昔のものがいまに残った。いざなぎ流は違うのです。時代に合わせてリニューアルし、変節することで生き残ってきたのです。それによって豊かな文化を、他の地域が失ってしまったものまでも伝えることができた。それを今日まで伝えてきた暮らしぶりこそを、誇りに思うべきです。

高齢化や過疎化により、その流れが断たれてしまうという状況があります。文化財として残すこと、研究することは大切です。けれども、暮らしていくことの方がもっと大切だと思います。文化は暮らしの中でこそ培われるのですから。